

GU'DAY

群馬大学情報誌
[グッデイ]



vol.3

2006 • Winter



「GU'DAY」は、「GOOD DAY」の表音(日常のあいさつ＝こんにちは・さようなら)で、「地域とのふれあい・コミュニケーション」を示すとともに、「GU (Gunma University) のDAY (時代)」も意味します。

2 GU'DAY TALK

[星野富弘氏に聞く]

他者のため折れる人間性を
群大の新しい個性に

4 CAMPUS WATCHING

北関東を代表する先端医療の拠点
[医学部附属病院]

6 TOPICS

- 群馬大学国際観光セミナー
- 女性専用外来
- 地域貢献活動学生協力者養成講座
- 畜産廃棄物の低温ガス化技術の開発

8 GUNDAL 最先端

21世紀COEプログラム

10 ひらく・むすぶ・地域と大学

小中学生のための医学研究者・医師・看護
師体験教室／工学部企業懇談会／前橋工科大、前橋商工会議所と連携協定

12 すばとと散策

医学部附属病院周辺／広瀬河畔に漂う浪漫の薫り かつての前橋が息づくレトロタウン

13 大学遺産

『新田文庫』 代々の殿様による
絵画や日記類を所蔵

14 あのとときGUNDAL

昭和初年、郷土研究で輝いた
群馬県女子師範

16 KEY WORD QUIZ MESSAGE

GU'DAY TALK

グッデイ・トーク／星野富弘氏に聞く（聞き手／学長 鈴木守）

居心地抜群だった

群大

学長 群馬大学時代の思い出や外側から見る群馬大学の印象はどうですか？
星野 高校が進学校で成績、

成績、と窮屈に過ごした反動で、自由で居心地が良かったですね。居心地が良すぎて1年余分に在籍することになりました（笑）。卒業以来初めて教育学部に行って驚いたのは、先生と学生が和気あいあいとしている点。私が学生の

当時とは全く違いました。学生運動が燃えさかり、群大もバリケードで塞がれたり、教授と仲良くするのは、何か悪いことをしているような雰囲気でした。
学長 すると親しい先生はいなかったんですか？

星野 体育専攻は、先生と上手くやっていた。実技の指導を一生懸命受け、練習していました。机に向かう勉強が好きじゃなかったもので、幸い、体育館は封鎖されませんでした。不謹慎だけど、ストで授業が出来なくなつて、随分練習も出来ました（笑）。
学長 あの頃、国立大の移動闘争が燃えさかり、反動で一気に熱が冷めて……。みんな感じていたでしょうが、多少行き過ぎがあつても学生たちはもう少し元気出してほしい。
星野 学生に限らず若い人たへ

他者のため祈れる人間性を群大の新しい個性に

✓ ち全般に、もっともつと自分の意見を言っていんじゃないでしょうか。丸くなり過ぎちゃっているというか。

生きる基本は農林業の体験ではないか

学長 昨今、世間を騒がせている問題で、いじめや子どもの自殺などがありますが、教職を経験した星野さんが、教師を目指す学生が多い群馬大学に望むことはありますか？
星野 誰にも負けないという位の専門的な知識を持って、教員になるべきだと思うんですね。私はそういう先生に魅力を感じます。「あの先生はすごいぞ」というのを先生の

中に見つけた時、生徒はついていくはず。もちろん人間ですから、欠点があつていい。もう一つは、やっぱり人間性。ただ教える技術だけでなく、幅広い、社会人としての知識と経験は、必要ですね。中で

も農林業の体験は生きる基本だと思ひます。泥だらけになつて、汗水垂らして、土を耕し、種を蒔く、草を刈る、木を伐採するとか、その中で何か得るものがあるはずですよ。
学長 そういった体験は確か



星野 富弘

1946年群馬生まれ。1970年群馬大学教育学部保健体育学科卒。中学校教諭となるがクラブ活動の指導中、頸髓を損傷、手足の自由を失う。1972年入院中、口に筆をくわえ文や絵を書き始める。1979年前橋で最初の個展開催。1982年高崎で「花の詩画展」を開催。以後、全国各地、海外で開催。1991年群馬県勢多郡東村（現みどり市東町）に富弘美術館開館。2005年には（新）富弘美術館開館。2006年群馬県名誉県民。雑誌、新聞に誌画、随筆を多数連載。著書に『愛、深き淵より。』『風の旅』など多数。

聞き手 学長 鈴木守

に必要なことですね。私も子どもの頃、近所の川で釣り遊びに夢中になりましたが、いま子どもが川で泳いだり釣りをしたり、あるいは山歩きしたり、そういう姿が見られない世の中になつてしまいまし

た。こうした問題に教育は向き合っていかなければなりませんね。

怪我は有り難い経験

星野 昔は、遊びでも虫や動物たちに残酷なことをしましたね。それで残酷な人間になるかといえばそうじゃない。やはり人間が育つ過程ではそういうことも必要なんですね。

学長 なるほど。星野さんが小さい頃お育ちになった群馬の土、自然、それから今の残酷についての話、そういったトータルの感性が詩画の世界に凝縮されている気がします。

星野 小さな山村で生まれ育ったことが、文章を書いた絵を描くことに役立っている。



るのは間違いないです。残酷な遊びとか恐いものを体験していない、知らないことが、とことんいじめ抜く現代のいじめに繋がっていく可能性があるような気がします。

学長 今は学校の先生が子どもの怪我を怖がって、川などでの遊びを禁止し、それが自然から遠ざからせてしまう一因になっているようですね。荒牧校舎の敷地内の奥の方には、巨大な松が沢山あり、小さいながら昔の利根河川敷の原生林みたいになっている。そこを近所の人に開放する予定なんです。

星野 私は、例えばそこで多少の怪我はしてもいいと思います。小さな怪我で痛みを知るの、非常に大事なことでないでしょうか。

学長 私は『愛、深き淵より』の中に、「不思議に明るさが

ある」と感じます。

星野 せっかく他人が経験できない大怪我を経験出来たのだから、これを大事にしたい。もしも私が怪我をしていなかったら、こうして学長さんと対談するなんてことは絶対なかったでしょう（笑）。有り難い怪我をしちゃったな、そんな気がしています。

地域から世界へと視点を向ける

学長 最後に群馬大学の学生や、目指す人たちに簡単なメッセージでもあれば。

星野 地域も大事だけど、世界に心を向けることも大事。例えば戦争によるアフリカを中心とする飢餓の問題に目を向けてください。1分間に飢餓だけで亡くなる人が17人。食糧を公平に分ければ、世界人口の2倍の人を養える。それが、ほとんど一部の先進国に集まり、日本では国連で援助している三倍くらいの食料が捨てられている。それを知るだけで今自分たちはどういう生活をしたらいいか、分かる。それから、他者、他人のために祈れる人になってほしいと思います。



北関東を代表する先端医療の拠点

[医学部附属病院]

総病床数705、1日平均外来数約1700人、教職員数1000人を超えるというスケール。患者の幸せを願って、日夜懸命の医療活動が行われている北関東の先端医療の中心的存在です。1943年の前橋医学専門学校設置よりすでに60年以上が経過。時代の経過とともに医療機能が充実し、多様な建物群が造られてきました。今後も先進的な医療活動・研究活動のため、附属病院は日々進化します。

外来診療棟

正門入ってすぐ右手に位置する医学部附属病院の“顔”とも言える外来診療棟。内科系

科、外科系科、感
覚器・運動機能系
科、脳神経・精
神・麻酔系科、小
児・女性系科、放
射線系科、総合診
療部、和漢診療科
などの診療科別に
分類され、外来患
者は平均すると1
日に約1700人
も訪れます。入口
玄関を入ると、吹
き抜けとなってい
て明るく開放感に
満ちた受付。売店、



外来診療棟





ヘリポート



立体駐車場
遠景は赤城山

理容室、美容室、生花店、キャッシュコーナー、食堂やレストランなどが機能的にレイアウトされています。

立体駐車場

2006年4月、念願の来院者専用立体駐車場が第四駐車場内にオープンしました。総駐車台数434台（病院全体では777台）と収容力もアップし、これまで駐車待ちが多かった来院者にとっては朗報となりました。

ヘリポート

2002年には、上毛三山や上越国境の山々を見渡せる南病棟屋上にヘリポートが設置されたことにより、遠隔地からのヘリコプター搬送が可能となりました。山岳遭難や怪我をはじめとする緊急を要する患者さんの搬送に月に数回程度使用されています。

中央診療棟

既存の施設では手狭となり、新たに建設されたのが地下2階、

地上4階の中央診療棟。手術部や放射線部、救急部など最新鋭の機器類をラインナップする新施設です。現在は正門から入って外来診療棟に乗り付ける形の救急



中央診療棟

車入口も、中央診療棟の建設に合わせて専用の入口が用意され、より迅速な救急体制が整備されることとなります。オープンは2007年4月を予定。

保育所

合わせて1000名を超える正規職員が働く医学部附属病院及び医学部。看護スタッフだけでも500名近くと、昭和地区で働く女性スタッフの数は相当数に上ります。こうした中、子育てしながら働く女性スタッフを応援しようと新たにつくられたのが、病院内保育所「ゆめのこ保育園」です。既に建物は完成し、2007年4月から稼働する予定。

ISHII HALL

2006年3月にオープンした、昭和地区で働く教職員と学生たちのアメニティ施設。カフェテリアや学習室などがあり、誰でも自由に出入りすることができ、学生も職員も自習したりくつろいだり、思い思いの時間を過ごすことができます。医

学部附属病院・医学部内にはこれまでこうした交流スペースはありませんでした。ISHII HALLは、本学の石井英男名誉教授の寄付によるものです。



ISHII HALL



ISHII HALL



保育所

群馬大学国際観光セミナー

外国人観光客をもっと群馬に

国際化が進む中、群馬にもっと外国から観光客を呼ぼうという声が大きくなっています。社会情報学研究科では、7月31日群馬県と共催で「群馬大学国際観光セミナー」（外国企業の経営陣を惹きつけるために）を開催しました。

このセミナーは、地域に貢献する大学として群馬の観光振興に一役買うために実施したもので、県内の旅館・ホテル経営者や観光振興に関わる人など約70人が参加。

群馬県観光局長による基調講演「今、群馬が『買いです！』」、物産オートモーティブ・インメディア（株）代表取締役社長で群馬大学客員教

授の下村正樹氏から「海外からのVIPを群馬に呼び込むための仕掛け」、社会情報学部部の寺石教授から「観光・医療連携が群馬に磁場を創造する」と題した提言がありました。

参加者によるフリーディスカッションも白熱、外国人客誘致に関する問題点や課題について認識を深めることができたようです。終了後のアンケートでは「参考になった」という意見が多く、次回開催を期待する声も多数寄せられました。



女性専用外来

予約、受付、看護師、医師まですべて女性

「女性医師に診て欲しい」という女性患者の増加に応じ、女性専用外来を設ける動きは各地で高まりつつあります。本学医学部附属病院も昨年4月、総合診療部内に「女性専用外来」を開設しました。

泌尿器科や肛門科の領域、また更年期症状

など女性に特有な症状を男性医師に診てもらうことに抵抗を感じたり、多様な症状があつて適当な診療科の見当がつかない、といった悩みを抱えた女性たちが多く利用しています。

診療日は、水曜日の午後で完全予約制、一人あたりの診察時間は30分ほどとたつぷり。婦人科領域をはじめ多岐にわたる相談に対応しています。

「今までうまく伝えられなかった症状を聞いてもらい、よかった」という声が多く、医師と患者の信頼関係構築が進んでいます。

「女性専用外来」では初期



診療を担当。診断の結果、総合診療が適する場合はそのまま初診の医師が担当し、専門治療が必要な場合は各科へ紹介しています。



予約方法は、1週間前までに氏名、生年月日、住所、電話番号、受診希望日、受診内容を明記し、FAXでお申し込みください。なお不明点は医療サービス課の阿久津までお気軽にどうぞ（027・220・7832）。

ボランティアの資質を高める

地域貢献活動学生協力者養成講座

本学に在籍する学生に対して、地域貢献活動の理論や知識、実習機会を提供する標記の養成講座が合宿を兼ね9月24・26日、国立赤城青少年交流の家で開催され、32人の学生が参加しました。

目的は、外部機関から要請された場合に本学が派遣する学生ボランティアの能力アップを図ること。ボランティアとして地域に役立つには？、活動の意味は？、体験の生かし方は？、安全性の確保は？こうした心構え、具体的な関わり方を講義・演習・実技を通して学びます。

4回目となる今回は、一橋大学の「まちづくりプロジェクト」との合同開催となりました。地域貢献の考え方からグループによる問題解決法や異文化体験についての講義、プロジェクトアドベンチャーや野外炊飯を通して知識、技能を学習。共同で研修を行う過程で両大学の違いも浮き彫り

になり、その差異がさらに活力を生み出すという刺激的な機会でもあったようです。

講座は、実行委員を中心とした学生たちも企画・運営に参加し、リーダーを勤めた片



プロジェクト・アドベンチャーで協働性を養う

山雄介君(社会情報学部4年)によれば「単なる仲良しでなく信頼関係を構築できるのが魅力」と語っていました。

メンバーとして参加予定だった二人の仲間、菅谷淳子さん、佐藤友希恵さんを交通事故のため合宿直前に失った参加者にとって、悲しみに耐えながらの合宿は、二人を偲び命の尊さを考え、絆を深める場でもありました。

将来的に石油資源の限界が指摘される中、本学工学部では、畜産・食品・木質廃棄物といった有機廃棄物を用いた低温ガス化技術の開発を進めています。



2006年度日本エネルギー学会賞を授賞した研究リーダーの工学部長宝田恭之教授とガス化装置

500℃600℃程度の低温状態でのガス化技術の開発に成功したが、この方法は、効率が悪く、しかも低温にもかかわらずタールを排出することのない画期的なものです。水素ガスや都市ガスの生成、燃料電池や発電などへ利用するため、現在実用化に向けた研究を進めています。

とりわけ近未来のクリーンエネルギーとして注目される水素ガスは、現在着々と基礎研究が進んでいます。

また、こうした低温ガス化には、低品位炭や低品位鉱物(Ni、Fe)などのイオン交換能を利用した安価な高活性触媒を用いますが、ガス化の過程で高純度のニッケル微粒子

といった機能性新素材を回収できることが分かりました。電極材料や粉末冶金、脱硫剤、活性炭などへ利用が可能で、商品化が期待されています。

このプロジェクトは、群馬県地域結集型研究開発プログラム「環境に調和した地域産業創出プログラム」の一つであり、現在2年目。ベンチャービジネス起業をも視野に入れて取り組んでいます。

畜産廃棄物の低温ガス化技術の開発

クリーン・ガスと機能性新素材で注目

21世紀COE[※]プログラム 「生体情報の受容伝達と機能発現」

GUNDAI

最先端

本学では、生命科学教育の拠点として、生体調節研究所を中心に多様な取り組みを行っています。こうした動きは、「文部科学省21世紀COEプログラム」の生命科学分野において研究教育拠点に選ばれたことから加速しています。生命科学教育の拠点づくりを紹介しましょう。

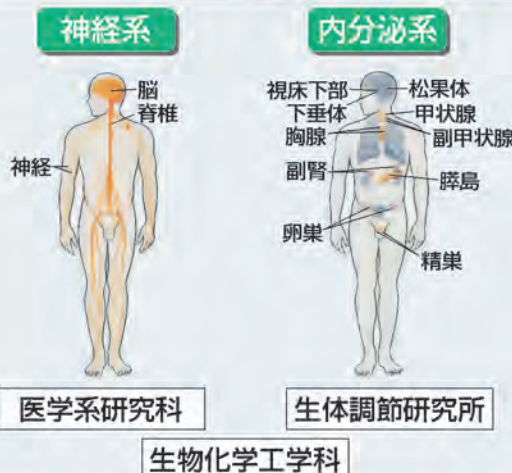
最終年度を迎えた 21世紀COEプログラム

本学が「文部科学省21世紀COEプログラム」の生命科学分野において研究教育拠点に選出されたのは、2002年度。それ以来、内分泌研究の伝統を引き継いだ生体調節研究所をプロジェクトの中心組織として、人間の生命活動の中心に内分泌系、神経系という二大情報伝達制御系があるというコンセプトのもと、ホルモン、神経伝達物質の作用機構、分泌機構、神経系と内分泌系の機能維持、形成機構などを解析する研究拠点の形成を目指してきました。このプロジェクトは、学内に分散している生命科学の研究組織を再編・統合し、世界的研究水準にある、内分泌系・神経系研究の総合的展開を図るものです。

生体調節研究所の研究拠点には、「生体情報の受容」、「情報の伝達」、「機能発

拠点形成の内容

「生体情報の受容伝達と機能発現」拠点形成



研究内容

歴史的にも世界的研究水準にある、**内分泌系・神経系**研究の総合的展開

研究環境

分散している学内生命科学組織の再編・統合

重点的支援

- ◆COE国際シンポ支援
- ◆若手研究者育成
- ◆定年事業推進員の研究継続
施設・スペース整備

群馬大学における生命科学研究拠点

教員組織の大学院講座化

医学系研究科医科学専攻

生命医科学専攻
修士課程の設置

学内組織との統合・改組

新生体調節研究所

附属生体情報
ゲノムリソースセンター

附属病院

新しいCEO拠点への チャレンジ

附属生体情報
ゲノムリソースセンター

計画

最先端



現「情報伝達システムの形成」の4つのプロジェクトがあり、16人の事業担当推進員から成ります。推進員の研究活動は、一つのプロジェクトに縛られることなくスタッフ間でコラボレーションしながら進めています。

全国28大学が拠点として選出された21世紀COEプログラムにおいて、本学は、2004年に中間評価としてAランクと高く評価されました。いま最終年度を迎え、より優れた研究拠点であるために様々な取り組みを続けています。

若手研究者の経済基盤、 キャリアアップを、グローバル感覚の育成を応援

COE研究員、リサーチアシスタントの採用、また若手研究者の研究費援助を大幅にアップしました。また、優れた研究業績のある若手スタッフには所長裁量により研究費を配分しました。さらに、群馬大学COE若手研究者奨励賞を設置し、優秀な若手研究者を支援しています。こうした取り組みは、若手研究者のキャリア向上に役立ちました。

この5年間のCOE研究員は22人（延べ34人）。この中から2006年度も継続あるいは新規の人を除いた15人のうち1人が大学の教授、6人が助手になりました。他にもCOE教員1人、民間企業研究員1人、学術振興会研究員2人、医員1人、米国留学2人と研究を

継続しています。

国際語である英語を媒介として研究し、研究を伝えていく能力を養うため、国際シンポジウム、国際セミナーをこれまで5回開催。こうしたシンポジウム、セミナーではCOE研究員、若手研究者を中心に英語による講演、ポスター発表を行いました。

研究教育拠点の 整備、改革

この5年間の間に、医学系研究科では教員組織の大学院講座化を実現し、2007年度には生命医科学専攻修士課

程の設置も予定しています。

また生体調節研究所では、2004年、ポストゲノムの時代に即応した方法により、これまで行われていた内分泌系をはじめとした生体調節系の制御機構解明をめざすとともに、生体情報ゲノムリソースセンターを設置し、ゲノム情報解析、遺伝子改変動物を作成し、研究のバックアップ体制を強化しています。さらに代謝シグナル研究展開センターを設置し、そこに生体調節系の仕組みに関する基礎的研究を集約し、その研究成果を糖尿病や動脈硬化などの生活習慣病に対する新たな治療戦略に応用するための組織構築を行いました。

●群馬大学21世紀COEプログラム研究例

■細胞外情報分子の動態と受容応答機構

【生体調節研究所・シグナル伝達分野：岡島史和】

■細胞内情報伝達に関わる蛋白質の構造解析

【工学部・生物化学工学科：若松馨】

■チロシンキナーゼ型受容体と脱リン酸化酵素

【生体調節研究所・バイオシグナル分野：的崎尚】

■オーファン受容体のリガンドスクリーニング

【大学院医学系研究科・機能分子生化学分野：和泉孝志】

■神経・内分泌細胞の細胞内輸送と極性形成機構

【生体調節研究所・細胞構造分野：原田彰宏】

■インスリン顆粒の開口放出機序と糖尿病の成因・病態生理

【生体調節研究所・遺伝子化学分野：泉哲郎】

■成長因子による高次機能発現細胞への分野誘導機構

【生体調節研究所・細胞調節分野：小島至】

■神経間シナプスの形成機序

【医学研究科・高次細胞機能学：白尾智明】

■神経筋接合部のシナプス形成機序

【生体調節研究所：城所良明】

■内分泌組織のオートクリン・パラクリンの機能構築

【生体調節研究所・分泌制御分野：竹内利行】

医学・医療・生命科学の世界にふれる

小中学生のための医学研究者・医師・看護師体験教室

夏休み後半の8月17・18日、小中学生に医学研究者や医師、看護師の考え方や仕事にふれてもらう体験教室が開かれました。

生命科学の時代といわれる21世紀、いま大学入学時の学生の理科、特に生物学の学力低下が医学部など理系学部で深刻化しています。そんな中、遠からず大学進学年齢に達する小中学生が医学・医療・生命科学に興味を持って、ヒューマニズムを考えるきっかけづくりをめざし、群馬大学医学部・医学部附属病院が主催する体験教室が今夏で5回目を迎えました。

対象は、小学校5年生から中学校2年生。延べ231人に及ぶ応募者から、医学研究者・医師・看護師の各体験コースに10人ずつの参加者が抽選で選ばれました。主な参加理由は将来の夢、家族の入院で興味を持ったからです。

参加者は、共通講義「生命倫理の学習」を受けた後は、血液型判定体験（医学研究者コース）、模擬患者での診療体験（医師コース）、病院看護体験（看護師コース）などの体験に取り組みました。昼食には病院食を味わい、「意外においしい」といった声もありました。

現役の医師や看護師、研究者らを講師に、参加者は真剣な表情で取り組み、濃密な2日間に充実感を感じている様子でした。



人工呼吸による応急手当



病院食の試食



後脳医学部長から修了証書を授与される受講生



聴診器を使った模擬診療体験



県内外から注目、 過去最多の来場者

工学部企業懇談会

工学部は、8月30日に産学官の連携強化を目的として「工学部企業懇談会」を開催しました。

今回で20回目を迎える懇談会は、大学院の拡充及び太田市への新学科設置に関する全国紙等による新聞広告、教員の企業への働きかけなど広報活動の強化によって、東京都や遠く宮崎県など県外企業からも注目を集めました。時折強い雨が降る悪天候の中、県内外から過去最多の206機関約310人の来場者（前年比1・25倍）がありました。

今年度は、実のある懇談の場を提供するための取り組みとして、全体会議や意見交換会の時間を短縮又は廃止して、分科会の時間を十分に確保しました。また、企業や官庁からのシーズ発信コーナーを設け、大学からの一方的な情報発信にならないよう工夫しました。年々好評を得るようになっていく企業懇談会ですが、実を上げるにはまだまだ問題が残されています。今後は企業懇談会前後の対策も検討し、産学官の連携協力体制を一層推進する考えです。

2006年2月、群馬大学・前橋工科大学・前橋商工会議所3者の間で、科学技術振興や地域文化発展を目的に産学連携による新たな街づくりをめざして連携協定が結ばれました。

「まちなかキャンパス構想」と「生命都市・いきいき前橋構想」を軸に、ゲノム情報解析部会、脳研究支援データベース部会、中心市街地活性化のための研究部会に分かれて活動が始まっています。

その第一回目の活動となる「まちなか討論会（辻説法）」が7月30日に前橋の中心にある前橋中央広場で開催されました。

当日は、社会情報学部寺石教授の進行により、ゲストとして高木前橋市長を迎え、鈴木学長、前橋工科大学松島学長及び前橋商工会議所曾我会頭による討論会（辻説法）が行われました。集まったのは、約200人の市民。中心市街地の活性化に向け多様な提案があり、関心の高さが伝わってきました。

続いて9月30日「楽しいおしゃべりおいしいお食事してますか!!」、10月29日「ペットと共にWan'dフルな1日を!!」というテーマで討論会を開催しました。今後も、「親子のまちなか寺子屋塾」、市民公開講座なども含めて定期的に開催していく予定です。

前橋工科大、 前橋商工会議所と連携協定

産学連携による 街づくりが加速





すぽと 散策

ろ まん 広瀬河畔に漂う浪漫の薫り かつての前橋が息づくレトロタウン

[医学部附属病院周辺]

医学部・医学部附属病院のある昭和キャンパス周辺は、国道17号や東部バイパスなどの幹線道路が走り、大型商業施設や多くの飲食店などで賑わっています。

しかし、そこからちよつと南方に向かうと、柳にゆられながら広瀬川がゆらゆらと流れ、古い街並みが残る古き良き時代の前橋が広がっています。

キャンパスから西へ向かうと、間もなく銀杏の木にこんもりと覆われた岩神稲荷神社。神社の背後に鎮座する巨岩、岩神の飛石(国指定天然記念物が)が神体。地上に出ている部分はごく一部なんだとか。「飛石」のすぐ西側を流れる広瀬川に沿って南下していくと、閑静な住宅街や古い商店街、寺社仏閣が点在。どことなくレトロな街並みは、かつて東部前橋線という路面電車の駅が岩神にあったことを物語っているようにも思われます。

レトロといえば、極めつけは「前橋るなばあく」です。50年以上もの長きにわたって市民に愛されてきました。2年ほど前にリニューアルし、今もたくさんの人たちで賑わう遊園地です。

周辺には、明治初年に迎賓館として建てられた県内最大級の木造建築物、臨江閣や桜の名所として市民に親しまれている前橋公園(さちの池)もあります。

広瀬川に沿ってぶらぶらとレトロな街角を散歩すれば、運動不足も解消、街の新たな一面を発見することができるかもしれません。



前橋るなばあく



岩神の飛石



風呂川



臨江閣



前橋地方気象台



前橋公園



広瀬川

GUNDAI

大学遺産

Heritage

『新田文庫』代々の殿様による 絵画や日記類を所蔵

新田文庫は、故新田義美氏^{よしとみ}によって寄贈された書籍・資料類で、中世文書の写し、新田岩松氏が江戸時代に記録した日記類・系図・由緒書・知行所から提出された文書等の近世文書と版本・写本の書籍類、さらに代々の殿様が描いた絵画から構成され、書籍類800点、中世文書の写し89点、近世文書1062点、粉本1264点等^{よしのとみ}に及び、現在総合情報メディアセンター図書館に収蔵されています。

新田岩松氏とは、新田氏と足利氏の両系統の血を引き継ぐ名家で、岩松時兼を祖とする。宗家なき後の新田荘の領主。源氏の流れを汲み、

知行高^{ちぎょうたか}120石ながらも大名並の待遇を受け、毎年参勤交代を行うことができた交代寄合格の家柄です。

新田文庫の中でひととき目をひくのが、18世紀の後半から新田岩松家の殿様を勤めた、孝純・義純・徳純・道純・俊純により描かれた夥しい数の絵画です。

彼らは、周辺地域をはじめ遠くは埼玉、長野などの養蚕農家から求められ、鼠よけの「猫絵」を描き配布していたことでも知られています。しかし、中心を占めるのは、花鳥画、風俗画、七福神、絵巻、書斎画、水墨画といった本格的な絵画類。孝純は狩野舟川に絵を学び、以降は代々家伝による独学だとされ、代々の作画は上毛狩野派の代表作とも評価されています。

また日記類で注目されるのが、広く東日本各地から新田岩松氏へ出入を求めてくる百姓・町人の姿。源氏の流れを汲む新田岩松氏と関係を結ぶことで社会的な威信を高めようとした様子が伺われます。幕末期、尊皇攘夷思想が高まり新田岩松氏の地位が急上昇するとともに出入りの数も急増。尊皇攘夷運動のシンボルとして新田岩松氏を擁立する動きにつながっていく背景を物語る資料です。



郷土研究で輝いた群馬県女子師範



1932年当時の群馬県女子師範正門



群馬教育学部附属小北門付近。石垣と土手は女子師範時代のもの

盛り上る 郷土研究

群馬県女子師範学校（以下、女子師範）が設立されたのは、1902（明治35）年、20世紀になって間もない頃でした。当時の資料の中には、明治45年7月、大正元年8月、大正元年9月などと記された、生徒による郷土誌があり

本学の図書館に収蔵される大量の明治期教科書。「それらは、なぜ集められたのか」。その謎をひもといていったどり着いたのは、本学の前身の一つである群馬県女子師範学校の輝き。ここでは、全国でも先進的な郷土研究が行われていたのです。今回は昭和初期の群馬県女子師範学校にフォーカスしてみます

ます。明治天皇崩御から、年号が大正に変わるまさにそのとき、研究がなされたもので、すでに女子師範の中に郷土研究勃興への萌芽があったことを物語っています。

こうした郷土研究が一気にスケールアップすることになったのは、大正デモクラシーの時代を経て昭和になってからでした。

1930

（昭和5）年、

「郷土教育連

盟」という

民間団体が

設立され月

刊誌「郷土」

をはじめ多

様な著作物

が出版され

ました。ま

た、時を同

じくして1

930・3

1年度、文

部省から師

範学校へ多

額の郷土研

究施設費が

交付されま

した。さら

に1931年には文部省による師範学校の規定が改定さ

れ、群馬県師範学校でも最終

学年の地理科で「地方研究」

が課されることとなります。

こうして時代的・制度的背

景のもと、郷土のことを学ぶ

環境が整えられていったので

す。師範学校の生徒は都市部

出身者が多く地方に赴任後そ

の土地の沿革や情勢を全く理

解していないというようなこ



野々山源治先生（右端）と生徒たち。野々山先生は、1927年から1934年まで在任



1929年5月から1934年5月まで女子師範の校長を務めた薩見陸治先生

女子師範の生徒たちが集めた明治期の教科書



昭和初年、

とがあったために、「地方研究」の学習が全国的に要請される時代でもありました。

昭和6年度の教科書収集

こうした中で、女子師範では、当時の藤見睦治校長が、郷土研究の重点項目として

- 2・郷土見学旅行案の作製
- 3・改正教授要目に準拠した学科の郷土的取り扱い案の作製
- 4・郷土研究室及び資料室の施設

などを掲げています。

郷土研究には資料集めが重要視されていきました。いま群馬大学には「群馬県女子師範学校郷土研究室印」のある明治期の教科書が約650冊も残されています。これらの教科書に記された収集者の氏名と卒業者名簿を照合すると、集めたのは1932（昭和7）年から37（昭和12）年までの卒業生で、また記された学年から収集された年度を調べると1931（昭和6）年だと分かりました。

昭和6年。それはまさに「郷土」がキーワードとなった年です。そして女子師範において、研究推進の原動力となったのは地理科主任の野々山源治先生でした。

野々山源治先生の奔走とともに

1927（昭和2）年、東

京師範学校を卒業と同時に女子師範に着任した野々山先生は、郷土施設費が交付されると、資料収集のために全県下と東京を奔走しました。さらに昭和7年には女子師範創立30周年の郷土研究資料展覧会を開催、その準備のために寝食を忘れて奮闘。同年、郷土研究室の完成に結実させます。全国的にも注目される研究室を作り上げた野々山先生の熱気は、生徒たちにも伝わり女子師範に郷土研究の華を咲かせることとなりました。

生徒たちが集めた明治時代の教科書は、この30周年の郷土研究資料展覧会に展示されました。生徒たちは、資料の収集だけでなく、それぞれのテーマで論文の作成にも取り組みました。本学図書館には、生徒たちが創りあげた、県内さまざまな土地の郷土誌が残されています。生徒たちは、郷土をどのように見ていたのでしょうか。それぞれの立場から郷土を研究した彼女たちは、卒業すると県下各地に教師として赴任し、郷土への愛着を感じつつ大地に根づいていったのです。



群馬会館



群馬県庁



前橋駅



女子師範の生徒たちの手による郷土誌



2007年は、猪突猛進で行こう!

さて、2007年の干支は亥(いのしし)ですね。猪といえば、「猪突猛進」。読んで字のごとく、猪がひたすらに突進する様子を言います。目標を定めたら、たいして深く考えもせずに突き進むわけで、時には方向性や手段を間違えてしまうことも。それでも「猪突猛進」には、何かもの凄いパワーを感じますね。あまりに慎重すぎでは、踏み込めない世界でも猪突猛進なら、勢いで突破してしまうかもしれませんよ。2007年は、「猪突猛進」してみてもいかがでしょうか? というわけで、今回は「猪」にまつわるクイズ。あなたの「猪突猛進」度を調べてみましょう。

1 イノシシが敏感なのはどこ?

a.鼻 b.腋の下 c.お腹

2 中国語で「猪」は何を意味する?

a.イノシシ b.ブタ c.周りを見ない人

3 日本列島に生息する野生のニホンイノシシの寿命はどれくらい?

a.約8年 b.約15年 c.約30年

4 猪といえば、顔のある部分の力が非常に強いことで知られています。それはどこ?

a.あご b.おでこ c.鼻

5 猪の脚力は非常に強く、時には()cm以上もの高さを助走なしで飛び越えることもできる。()に入るのは?

a.300 b.200 c.100

6 猪の子どもは、何と呼ばれる?

a.ウリ坊 b.シシ坊 c.しま坊

7 猪の繁殖期は?

a.1年中 b.12月頃から約2カ月
c.4月頃から約2カ月

8 猪の雄が春になると痩せるのはなぜ?

a.冬眠するため b.好物の木の实がないから
c.繁殖期間中ほとんど餌をとらないため

9 獣肉食が禁じられていた時代、山間部では秘かに「 」と称して食べられていた猪肉。さて何と呼ばれていたでしょう?

a.山鰻 b.山河豚 c.山鯨

10 猪肉は、切り分けて皿に盛った様子があはに似ていることから「□□肉」とも言われる。さて何肉と言われるでしょう?

a.向日葵肉 b.牡丹肉 c.薔薇肉

11 奄美大島、徳之島、沖縄本島、石垣島、西表島などに生息する猪を何と言う?

a.リュウキュウイノシシ b.オキナワイノシシ
c.イリオモテイノシシ

12 「食道楽70年を回顧し、後にも先にも猪の肉がこれほど美味しいと思ったことはない。私が食物の美味さということを初めて自覚したのは実は猪肉だった」と語った有名人はだれ?

a.海原雄山 b.北大路魯山人
c.田中康夫

13 川辺で傷ついた猪が湯浴みするのを村人が見つけたことから始まると伝えられる群馬県内の温泉はどこ?

a.下仁田温泉 b.碓氷温泉 c.伊香保温泉

14 猪の赤ちゃんは一度に何匹産まれる?

a.約10匹 b.1~2匹 c.約5匹

15 世界に何種類ほどの猪がいるでしょう?

a.30種類 b.100種類 c.200種類

16 滋養強壯の食材とされる猪肉についた別名を何という?

a.薬肉 b.薬喰い c.力肉

17 本来山に住む猪が近年人里に出没するようになり、その被害も見逃せません。11月22日には前橋の市街地を逃走した猪が群馬大学部の敷地内を横切ったという事件も起こりました。さて、この猪はどうなったのでしょうか?

a.約4時間後に麻酔銃で打たれ捕獲さ

れた b.追跡を振り切って山へ逃げ帰った c.猪料理屋に捕獲された

18 「シシ食ったむくい」ってどういう意味?

a.猪を食べるとバチが当たる b.猪を食べると身体がぼかぼか温かくなる

19 猪の指は何本?

a.前後とも3本ずつ b.前後とも5本ずつ
c.前後とも4本ずつ

20 古来、山の神とされ信仰の対象ともなった猪。巨大なイノシシ神が登場する映画といえば?

a.風の谷のナウシカ b.もののけ姫
c.となりのトトロ

21 猪が体を木にこすりつけるのはなぜ?

a.ダニを落としているから
b.気持ちいいから c.泥を落とすため

22 畑を食い荒らす猪による被害が年々増えているという。その額は年間いくら?

a.10億円 b.50億円 c.100億円

23 猪肉の牡丹鍋は、一般的に何味?

a.塩味 b.醤油味 c.味噌味

24 明治33年、亥年に発行されたある紙幣にはイノシシがデザインされましたが、その紙幣はさていくら?

a.1円 b.10円 c.100円

25 亥(イノシシ)は何番目の干支?

a.1番目 b.3番目 c.12番目

答え 1.a 2.b 3.a 4.c 5.c 6.a 7.b 8.c 9.c 10.b 11.a 12.b 13.a
14.c 15.a 16.b 17.a 18.b 19.c 20.b 21.a 22.b 23.c 24.b 25.c

判定 ●0~10問正解→慎重派のあなた。時には自分の殻を脱ぎ捨てることも必要では? ●11~15問正解→猪突猛進しようと思っても、「あとちょっと」の決断で迷うあなた。2007年は「迷ったら10秒以内に決断」くらいの覚悟でチャレンジ。●16~20問正解→今のままでも猪突猛進な勢いのあるあなたですが、この際あとひとふんばりして頑張ってみよう。●21~25問正解→自他ともに認める猪突猛進なあなたはまさに2007年型。このまま時代を駆け抜けていこう。

Vol.2の答え

S	P	O	R	T	U	V
T	R	A	L	U	A	
R	E	G	E	V	I	A
I	D	I	O	M	I	P
K	O	N	I	E	S	
E	S	R	C	D	I	
V	E	G	A	C	O	L
B	A	G	R	I	B	
A	S	E	B	A	L	

GUNDAI情報誌「グッディ」vol.3

第3号発行 平成18年12月31日

編集・発行 国立大学法人

群馬大学広報戦略室

〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町四丁目2

TEL027-220-7010

FAX027-220-7012

E-mail:

s-public@jimu.gunma-u.ac.jp



※表紙ロゴマーク
「国立大学法人群馬大学ロゴマーク」平成18年4月制定
群馬大学の英文通文字「G」をモチーフに緑と青で豊かな自然環境を示し、学生の成長と活躍をイメージして、新しい未来の創造と、社会へ貢献する大学の存在感を表現しています。

「グッディ」第3号、待望の発刊です! 第2号から、なんと9カ月ぶり。

「どうしちゃったの?」「早く読みたかったよ」なんていうあなたのために編集作業も猪突猛進で行いました。さて、「グッディ」3号では「TOPICS」や「ひろく・むすぶ・地域と大学」などで2006年度の群馬大学の主な出来事を振り返りました。しかし誌面には掲載していませんが、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」や「派遣型高度人材育成協同プラン」に採択決定されたり、2008年度の完成を目指し進められている重粒子線照射施設の建設、今までなかった大学のロゴマークが決まったことなど、見逃せない話題が数多くありました。

また大学も学内だけにとどまらず、積極的に街に出て、産業界などと協力していくという方向性をより鮮明に打ち出した一年だったとも言えるかもしれません。編集部では、ご感想・ご意見お待ちしています。皆さんのアイデアを積極的に取り入れてコミュニケーションしながら、よりよい「グッディ」にしていきたい。次号は、より短い間隔で皆さんのもとに本誌を届けられるよう頑張ります。

M
E
S
S
A
G
E